

現代の地方都市における未来構想

— 長崎県平戸市「平戸市未来創造羅針盤」を中心に —

村上 則 夫

I. 序 言

日本人の平均寿命は、長らく世界の中でもトップクラスに位置づけられているが、数年前からは、「人生100年時代」という言葉を頻繁に耳にするようになり、日本＝長寿社会というイメージが定着している。

しかしながら、日本全体の総人口は、年々微減傾向にあり、少子化が進んでいる。そのような状況にあって、高齢化ばかりが進んでいくという社会的傾向が好ましいはずはない。日本の各地方都市は、急速な少子高齢化や人口流出に苦しみ、なんらかの対策を講じなければ、確実に地方都市は衰退傾向に向かうか、あるいは、“消滅”の危機を迎えるのを待つばかりとなる。

筆者は、過去に著した小稿で、現代は「過去の時代にみられたように、何もしくなくても人口が増大し、地域社会が量的にも質的にも拡大していくという時代にはない。いままさに、地域社会は自然に所与として〈あるもの〉ではなく、地域住民がみずからの地域社会と積極的にかかわり、真正面から向き合って実際に行動し、みずからの手で〈創り出して〉いくことが必要となっている」とし、「誰もが、みずからがその身体を置く地域社会の現実から目をそらすことなく、地域社会が抱えている地域課題を解決しつつ、地域住民一人ひとりの〈いのち〉と〈絆〉を大切にしたい魅力的で、生き生きとした、心豊かなまちづくりを行うことが重要であり、その必要性が高まっている」¹⁾と指摘した。

さて、一般的に、「総合計画」とは、中長期的な展望に立って策定され、県市町村政を総合的かつ計画的に運営するための重要な指針となるもので、県市町村におけるさまざまな計画の中でも、最上位に位置づけられる計画といってよい。

このたび、筆者は、長崎県平戸市の「平戸市総合計画審議会条例」（平成18年平戸市条例第12号）第1条の規定により設置された「平戸市総合計画審議会」の会長として、約1年半にわたって、2018年度から10年間（～2027年度）にわたるまちづ

くりの指針となる第2次の平戸市総合計画、すなわち、「平戸市未来創造羅針盤」の策定にたずさわり、度重なる審議・検討を経て2018年3月に第2次平戸市総合計画の策定を終了した。2005年（平成17年）の「新平戸市」誕生後、今回が2回目の総合計画の策定となる。

そこで、小稿では、この「平戸市未来創造羅針盤」²⁾を中心に提起し、地方都市のひとつである長崎県平戸市がどのようなまちづくりを計画し展開しようとしているのか、その主要内容について簡潔に紹介する作業を通じて、地方都市の現状とまちづくりの未来構想について考察することとしたい。

II. 地域社会の厳しい現実に向き合う

数年前から、日本では、「人生100年時代」という言葉を頻繁に耳にするようになった。日本人の平均寿命および健康寿命が延びる中で、いまや100歳まで生きることを前提に自分自身の人生設計を描く時代がきたということであろう。

2018年7月に厚生労働省が発表した「平成29年簡易生命表」³⁾によると、2017年における日本人の平均寿命は男性81.09歳となり、過去最高（前年の80.9歳）を更新し、一方、女性の方は87.26歳となり、過去最高（前年の87.14歳）を更新して、主要国の中でも上位に位置している（第II-1表および第II-1図参照）。また、同省は、2017年9月15日時点で、100歳以上の高齢者は全国で6万9,785人にのぼり、48年連続で過去最高を記録して、10年前に比べてその約2倍増えたとする調査結果を明らかにしている。

健康長寿社会の発展を目的につくられた公益財団法人・長寿科学振興財団のウェブサイトで、日本人はなぜ長生きか、その長生きの理由として、①「日本食（和食）」という日本の独特の食文化、②医療制度の充実の二つを挙げている⁴⁾。

その他にも、日本人の長寿の理由として、その生活環境・社会環境の向上、あるいはまた、全国的な医療体制（組織・機関）の整備や世界でも高水準の医療・看護技術の進歩、さらには国民の健康志向への高まりなども考えられる。

確かに、この地上における人生が長いということは、多くの人間の希望であり、喜ぶべきことであろうし、実際に長寿でありたいと切に願って、自分自身の健康管理や健康維持・増進などにいろいろな努力を行っている国民も数多い。

とはいえ、「長寿」と「幸福」は、イコールといえるのだろうか⁵⁾。

内閣府は、2018年8月24日に2018年度の「国民生活に関する世論調査」（調査は、全国の18歳以上の10,000人を対象に、2018年6月14日～7月1日を調査期間として

第Ⅱ-1表 平均寿命の国際比較

(単位：年)

	国名	作成基礎期間	男	女	(参考)人口 (万人)	
	日本 (Japan)	2017*	81.09	87.26	12 465	
アフリカ (AFRICA)	アルジェリア (Algeria)	2016	77.1	78.2	4 084	
	エジプト (Egypt)	2017*	70.8	73.6	9 102	
	南アフリカ (South Africa)	2014	59.1	63.1	5 591	
	チュニジア (Tunisia)	2016*	74.5	78.1	1 130	
北アメリカ (NORTH AMERICA)	カナダ (Canada)	2013 - 2015*	79.8	83.9	3 629	
	コスタリカ (Costa Rica)	2015	77.37	82.42	489	
	キューバ (Cuba)	2011 - 2013	76.50	80.45	1 124	
	メキシコ (Mexico)	2015	72.3	77.7	12 227	
	アメリカ合衆国 (United States of America)	2015*	76.3	81.2	32 313	
南アメリカ (SOUTH AMERICA)	アルゼンチン (Argentina)	2008 - 2010	72.08	78.81	4 359	
	ブラジル (Brazil)	2016*	72.2	79.4	20 608	
	チリ (Chile)	2014	76.75	82.46	1 819	
	コロンビア (Colombia)	2010 - 2015	72.07	78.54	4 875	
	ペルー (Peru)	2010 - 2015	71.54	76.84	3 149	
アジア (ASIA)	バングラデシュ (Bangladesh)	2016	70.3	72.9	16 080	
	中国 (China)	2015*	73.64	79.43	137 122	
	キプロス (Cyprus)	2015	79.8	83.5	85	
	インド (India)	2012 - 2016*	67.4	70.2	121 337	
	イラン (Iran)	2011	71.5	74.0	7 969	
	イスラエル (Israel)	2011 - 2015	80.09	83.79	838	
	マレーシア (Malaysia)	2016*	72.6	77.2	3 166	
	パキスタン (Pakistan)	2007	63.55	67.62	19 171	
	カタール (Qatar)	2015	77.51	82.12	262	
	韓国 (Republic of Korea)	2016*	79.3	85.4	5 125	
	シンガポール (Singapore)	2017*	80.7	85.2	561	
	タイ (Thailand)	2016*	71.8	78.6	6 593	
	トルコ (Turkey)	2013 - 2015	75.3	80.7	7 874	
	ヨーロッパ (EUROPE)	オーストリア (Austria)	2017*	79.27	83.89	869
		ベルギー (Belgium)	2016*	78.78	81.26	1 131
チェコ (Czech Republic)		2016*	76.22	82.05	1 055	
デンマーク (Denmark)		2016 - 2017*	79.0	82.9	572	
フィンランド (Finland)		2016*	78.4	84.1	551	
フランス (France)		2017*	79.5	85.3	6 473	
ドイツ (Germany)		2014 - 2016*	78.31	83.20	8 218	
ギリシャ (Greece)		2015	78.14	83.17	1 078	
アイスランド (Iceland)		2016*	80.7	83.7	33	
イタリア (Italy)		2016*	80.562	85.044	6 067	
オランダ (Netherlands)		2017*	80.1	83.4	1 698	
ノルウェー (Norway)		2017*	80.91	84.28	524	
ポーランド (Poland)		2016*	73.94	81.94	3 797	
ロシア (Russian Federation)		2014*	65.29	76.47	14 351	
スペイン (Spain)		2016*	80.31	85.84	4 645	
スウェーデン (Sweden)		2017*	80.72	84.10	985	
スイス (Switzerland)		2016*	81.5	85.3	833	
ウクライナ (Ukraine)		2013	66.34	76.22	4 259	
イギリス (United Kingdom)		2014 - 2016*	79.17	82.86	6 538	
オセアニア (OCEANIA)		オーストラリア (Australia)	2014 - 2016*	80.4	84.6	2 413
	ニュージーランド (New Zealand)	2014 - 2016*	79.91	83.40	469	

参考：香港 (Hong Kong) の平均寿命は2017年*で、男が 81.70 年、女が 87.66 年である。(人口 734 万人)

資料：国連「Demographic Yearbook 2016」。

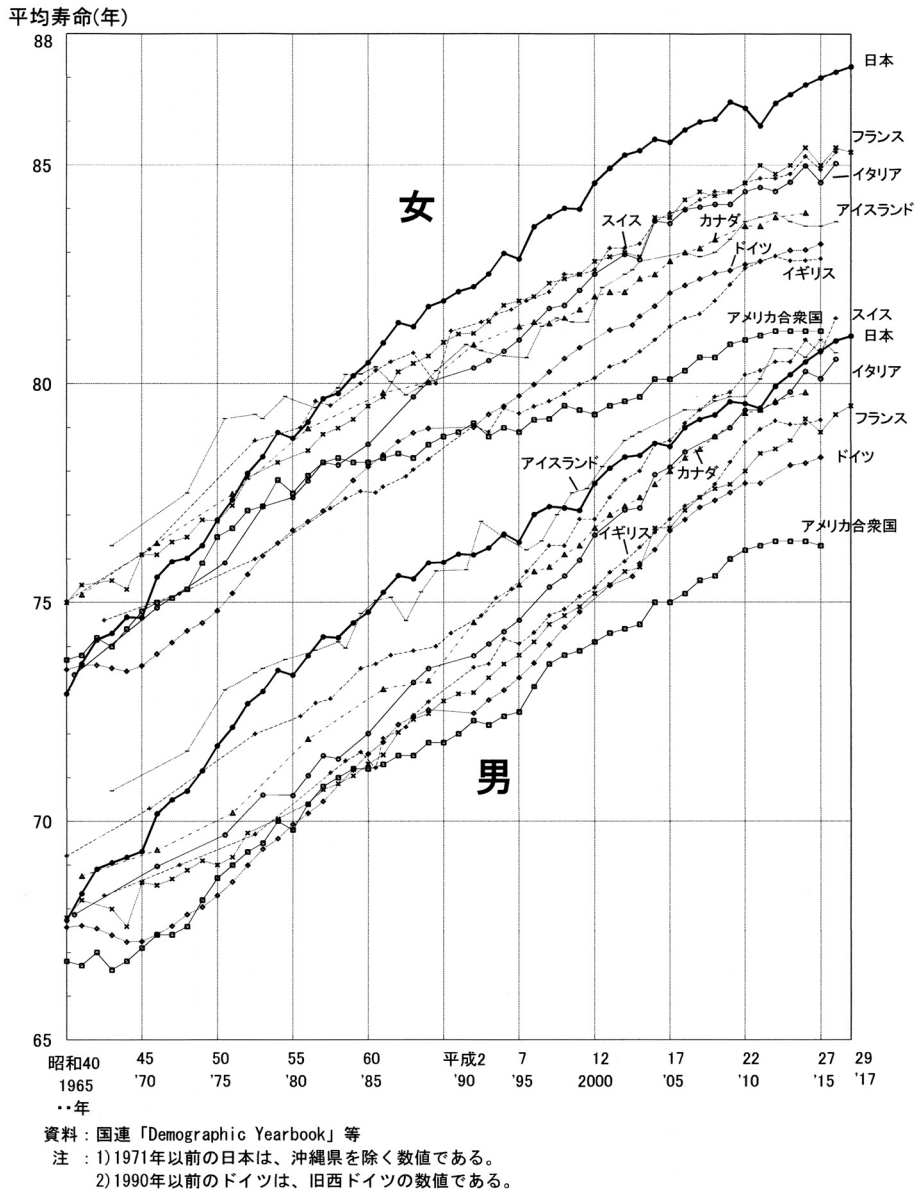
ただし、*印は平均寿命が当該政府の資料によるものである。

注：人口は年央推計人口で、2016年の値である(中国、イスラエル、パキスタン、トルコは2015年。ロシアは2013年。インドは2012年)。

ただし、日本は平成29年10月1日現在日本人推計人口である。

(出所) 厚生労働省「平成29年簡易生命表の概況」より。

第Ⅱ－1図 主要国の平均寿命の年次推移

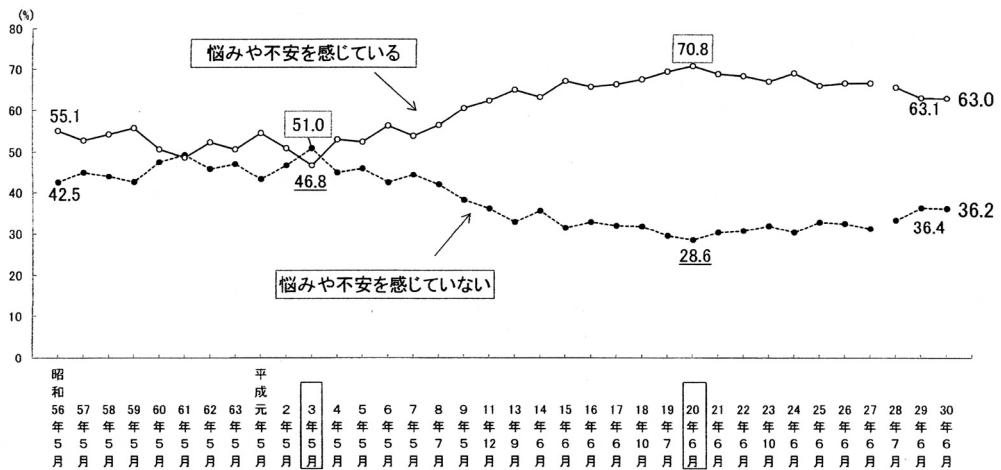


(出所) 第Ⅱ－1表に同じ。

調査員による個別面接聴取で実施。有効回収数は5,969人/回収率59.7%)を公表しているが⁸⁶⁾、この調査によると、日頃の生活（日常生活）の中で「悩みや不安を感じている」と回答した人の割合は、総数で63.0%にのぼり、「悩みや不安を感じていない」と回答した人の割合（36.2%）の約2倍弱にもなっている（第Ⅱ－2図参照）。

また、回答者のうち、「悩みや不安を感じている」とする回答者の内容の項目（複数回答）では、「老後の生活設計について」が最も多く（55.4%）、次いで、「自分の健康について」、「家族の健康について」、「今後の収入や資産の見通しについて」および「現在の収入や資産について」の順となっており、この上位5項目は、いずれの項目も前年度よりその割合が増えている（第Ⅱ-3図参照）。

第Ⅱ-2図 日常生活での悩みや不安（時系列）



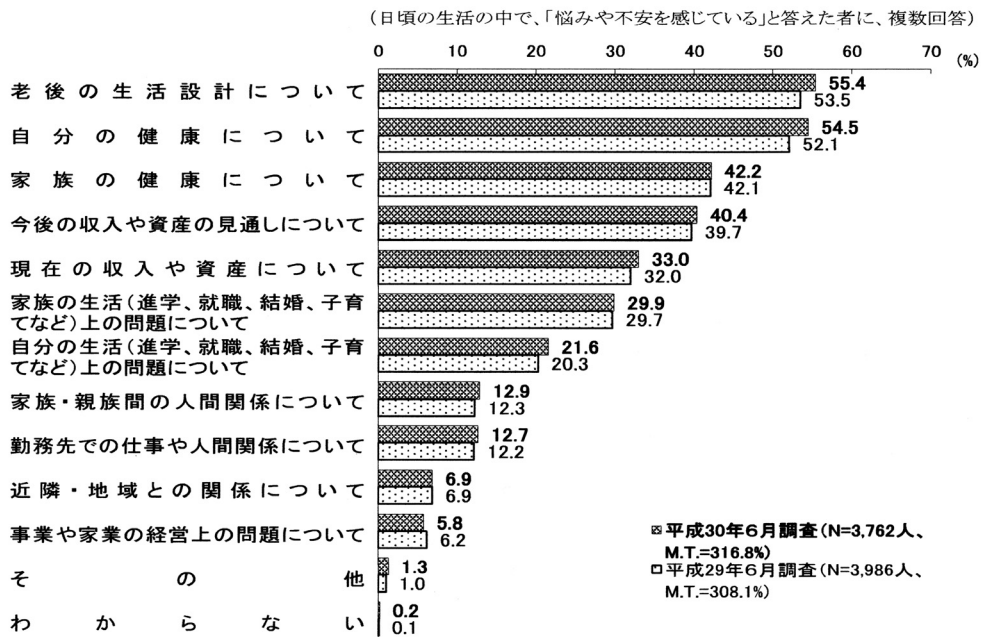
(出所) 内閣府「国民生活に関する世論調査 (2018年度)」より。

周知のように、日本では3K職場という言葉があり、労働環境・作業内容が「きつい (Kitsui)」、「汚い (Kitanai)」および「危険 (Kiken)」を3Kと称しているが、これらに同じく模して、「金 (Kane) の不安」、「健康 (Kenkou) の不安」および「孤独・孤立 (Kodoku, Koritsu) の不安」を現代に暮らす高齢者の3Kと称しても、あながち大きな誤りではないような状況が生じている。

しかしながら、どのような時代にあっても、1人ひとりの人間の重要な生活拠点である地域社会の形成（構築）、すなわち、“まちづくり”のあり方や方向性において、絶えず「人が人として人らしく生きる」ために⁷⁾、いま何が必要であり何が必要でないのか、あるいはまた、どのように物事を進め、何をやるべきなのか、ということについて、コミュニティ全体としても、また一人ひとりの個人としても真剣に考える必要がある。

私たちの現実の生活が厳しく、“人が生きにくい社会”であればあるほど、では、人間は「どう生きるべきか」、「どのような人生をおくるべきか」、そしてさらに、「ど

第Ⅱ－3図 悩みや不安の内容（複数回答）



（出所）第Ⅱ－2図に同じ。

のように死ぬべきなのか」について思考することは⁸⁾、人間の人生にとってきわめて重要であり、現代の地域社会に生きるすべての人間の切実な課題の一つであると思えるのである。

さて、地域社会というコミュニティ全体の視点に目を移してみると、現代の地域社会は、さまざまな地域課題を抱えている。

よく指摘されているように、少子高齢化をはじめ、価値観や生活スタイルの多様化、核家族化、地方圏から大都市圏への人口移動などによる地域の過疎化、地域における都市的な生活様式の浸透と都市化の進行によってもたらされる環境破壊や汚染がもたらす生活問題などによって、従来のコミュニティの弱体化、解体化が進み、お互いの連帯感が低下して助け合いの精神が希薄化するという問題が続いている。加えて、住民の価値観や生活スタイルの多様化などから地域の自治会や町内会などの自治組織への加入率が低下し、結果として防災や防犯面が手薄となって住民の日常生活が危険にさらされたり、地域による子育て家族への支援が難しくなるといった問題なども起きている。

数年前に発生した阪神・淡路大震災や東日本大震災、さらに熊本地震（2016年4

月)は、過去の幾つかの戦争は例外としても、平和といえる我が国の社会に、そして経済にこれまで経験したことの無い深刻なインパクトを与えている。

現実には起きた大きな震災では、多くの家屋が倒壊し、ライフラインは止まり道路も寸断されて、数万人単位で避難生活を余儀なくされている。住民の日常生活が突然破壊されたことから、長い間に築きあげられてきた住民一人ひとりの生活の場である地域コミュニティが一瞬で分断、ないしは寸断され、人と人との〈絆〉を失って孤立し、ただ生きることさえ困難を感じた経験をもつ住民は多いだろう。その結果、深い孤立感や孤独感も増して、住民一人ひとりの〈いのち〉の危機が生じるとともに、人間としての〈生きる力〉が減退したり、幸福感を喪失するといった事態も招いているのである⁹⁾。

しかし、日本においては、それぞれの地域社会を重要な生活の拠点とする生活状況が厳しいなかであって、いろいろな地域課題を解決しつつまちづくりを進めようとする人間の努力が行われている。

そこで、以下では、地方都市のひとつである長崎県平戸市がどのようなまちづくりを計画し展開しようとしているのか、その主要内容について簡潔に紹介する作業を通じて、地方都市の現状を捉え、近未来のまちづくりのあり方について考察することとしたい。

Ⅲ. 長崎県平戸市の現状と未来構想

1. 地方都市としての平戸市の構図—市の姿—

長崎県平戸市は、九州の西、長崎県の北西端に位置し、平戸島、生月島、大島、度島(たくしま)、高島の有人島および九州本土北西部の沿岸部に位置する田平と周辺の多数の島々で構成されている。平戸島は、佐世保市から北西約25km、長崎市から北北西約80kmの距離にあり、平戸大橋により田平(本土)と、生月島は生月大橋により平戸島と結ばれている。大島、度島、高島は離島であり、唯一の交通手段は船舶である。

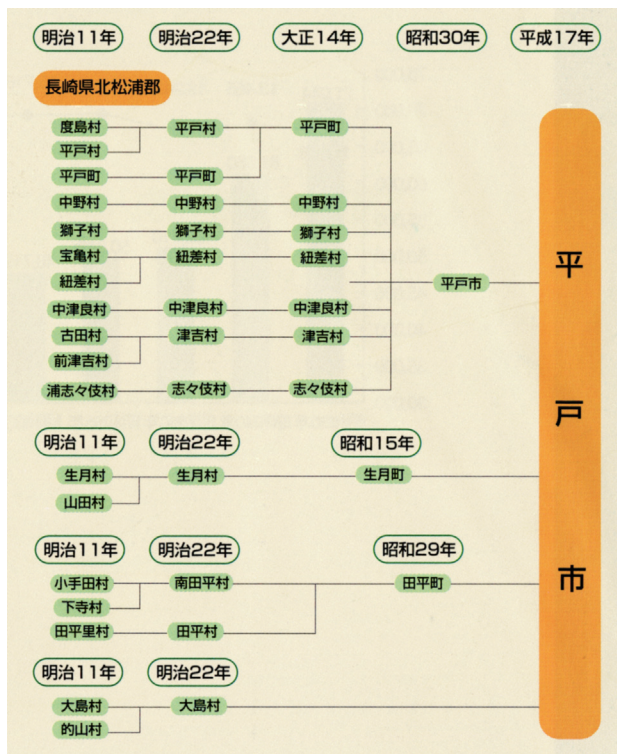
平戸市の面積は235.60km²で、河川は総じて短小で、平坦地は少なく起伏の多い地形で、海岸線は各所に岬が突出し、断崖などの自然景観が美しく、市の約20%が西海国立公園に指定されている。入り組んだ海岸線を持っていることから湾が多く、漁港は大小33港にも及んでおり、日本有数の漁港数を有している。気候的には、島の周囲が海に囲まれており、対馬暖流と季節風の影響を受けて、海洋性の温暖な気候となっている。

同市のWebページによると、2016年10月に公表された2015年国勢調査確定値によれば、総人口は、31,920人(男性：14,874人／女性：17,046人)、世帯数は、12,421世帯となっている¹⁰⁾。また、2018年度の市の一般会計当初予算は、263億7,100万円である。

平戸市といえば、“歴史のまち”といってもよく、日本で最初となる海外との交流を行い、古くから海外貿易が盛んに行われ、飛鳥時代、白鳳時代には遣隋使、遣唐使の寄港地としても広く知られている。大航海時代には、アジアやヨーロッパなど大陸交流の玄関口として栄え、16世紀にはポルトガル船が来航し、また、17世紀前半にはオランダやイギリスの商館が置かれるなど開かれた国際都市「西の都」として日本の近世、近代を切り開く礎となった。

近代にいたっては、1871年（明治4年）の廃藩置県後、市の各地区は市制、町村制施行などによりさまざま変遷を重ね、1889年（明治22年）に大島村、1940年（昭和15年）に生月町、1954年（昭和29年）に田平町、1955年（昭和30年）に1市2町1村からなる平戸市が発足し、さらに2005年（平成17年）10月1日に、歴史的にも

第Ⅲ－1－1図 平戸市の沿革



(出所) 長崎県平戸市企画課『平戸市総合計画』(2008年度～2017年度)、2008年より。

第Ⅲ-1-1表 平戸市の代表的な地域資源一覧

区 分	地 域 資 源
自然資源	千里ヶ浜海水浴場、西浜海水浴場、根獅子海水浴場、大バエ灯台、塩俵断崖、黒子島、川内峠、山頭草原、大賀断崖、中瀬草原、大根坂棚田、志々伎山、鯛の鼻、吹上高原、平戸つつじ、マキ、やぶ椿、海寺跡のハクモクレン、是心寺のソテツ、板ノ浦のアコウ、半元キャンプ場、大賀キャンプ場、城山公園
社会資源	<p>〔施設・建物〕</p> <p>平戸大橋、生月大橋、田平公園、たびら平戸口駅（日本最西端の駅）、的山大島風力発電所（西日本最大規模）、道の駅「生月大橋」、道の駅「昆虫の里たびら」、たびら昆虫自然園、平戸文化センター、グリーンヒルズ、いさりびの里（漁火館）、平戸新鮮市場、山海の四季、ふれあい友市、水産物直売所「旬鮮館」</p> <p>〔食〕</p> <p>川内かまぼこ、あご、平戸ひらめ、平戸牛、カスドース、牛蒡、餅、うちわエビ、ひらどロマン（菌床しいたけ）、鯛茶漬</p> <p>〔事業〕</p> <p>渡海人まつり、津吉茶市、いきつき勇魚まつり、つばき物産展、大島村ふるさと祭り、木ヶ津千灯籠まつり、たびら春・夏まつり、いきつきロードレース、たびら中津草原クロスカントリー、ひらどツーデーウォーク</p>
人的資源	フランシスコ・ザビエル、三浦按針（ウィリアム・アダムス）、ジャックス・スペックス、リチャード・コックス、鄭成功、弘法大師空海、栄西、山鹿素行、松浦静山、吉田松陰、種田山頭火、黒崎義介、藤浦洸、益富又左衛門、生月鯨太左エ門
歴史・文化資源	平戸城、幸橋（オランダ橋）、田平天主堂、宝亀教会、聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂（平戸教会）、黒田原歴史民俗資料館、大島ふるさと資料館、切支丹資料館、松浦史料博物館、平戸観光資料館、最教寺霊宝館、平戸和蘭商館跡、入口遺跡、黒田原遺跡、寺院と教会の見える風景、朝鮮井戸、焼罪史跡公園、かくれキリシタン殉教地、生月大魚藍観音、住吉神社、雄香寺

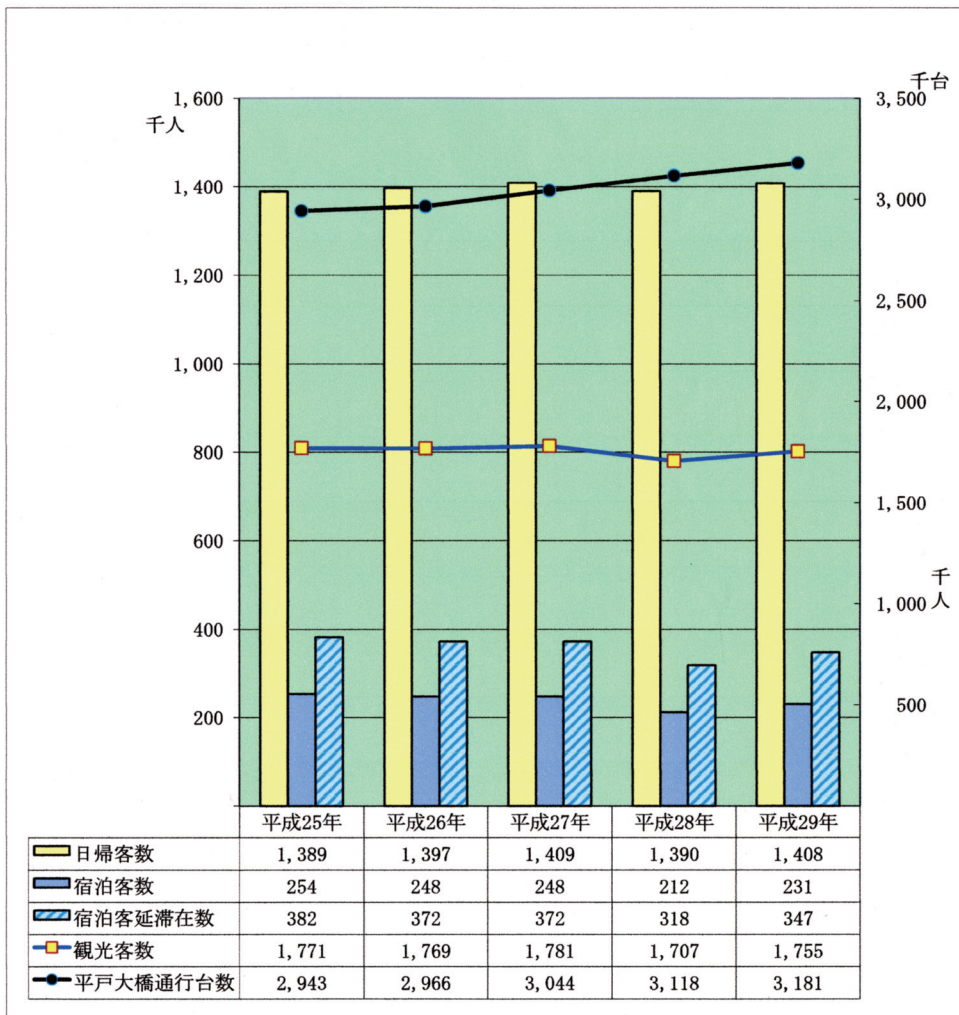
（出所）第Ⅲ-1-1図の出所資料を基礎に筆者が編集したもの。

深いつながりのある1市2町1村の合併が実現して、新しい「平戸市」が誕生した（第Ⅲ－1－1図参照）¹¹⁾。

現在の平戸市には、市が古くから海外との交流により栄えた歴史を感じさせる史跡が数多く存在するなど、魅力的で豊富な地域資源があり、平戸市といえば有名な観光場所と記憶されるほどに、長崎県有数の観光地としての知名度も高い。第Ⅲ－1－1表は、市の代表的な地域資源をまとめたものである。

また、第Ⅲ－1－2図から知れるとおり、2017年の平戸市の観光客数は、175万5千人と前年より約4万8千人（2.8%）増加している。日帰り観光客数は140万8

第Ⅲ－1－2図 平戸市観光客（全体）の推移



（出所）長崎県平戸市「観光統計」（2017年）より。

千人で前年より約1万8千人（1.3%）の増加となり、宿泊客数は23万1千人で前年より約2万人（9.3%）の増加となった。観光消費額は、98億7千9百万円で約3億1千6百万円（3.3%）の増加となっている。なお、平戸市では、2017年の日帰り観光客数が増加した要因として、熊本地震の反動や西九州自動車道の延伸により、増加したとみている¹²⁾。

2. 平戸市未来創造羅針盤 - 「第2次平戸市総合計画」 -

2-1. 平戸市未来創造羅針盤とは - その構成 -

「総合計画」とは、地方自治体が策定する自治体のすべての計画の基本となり、まちづくりの最上位に位置づけられる計画である。地方自治体の行政運営の総合的な指針となる計画として、日本のすべての都道府県や市町村が策定している。総合計画は、一般的に、計画の基本部分（基本的な施策の大綱を示す部分）となる「基本構想」、基本構想において設定した将来目標や基本的施策を実現するための手段や方法などを体系的に明記した「基本計画」、そしてさらに、基本計画の施策に基づいてさまざまな事業内容および具体的な実施期間を明らかにし行財政運営の指針となる「実施計画」から成り、現在、ほとんどの地方自治体では、10年程度の期間を設けて策定するところが多い。

現在、長崎県の場合は、「人、産業、地域が輝く、たくましい長崎県づくり」を基本理念とする、2016年度から2020年度までの5年間の県政運営の指針や考え方を示した総合計画「長崎県総合計画 チャレンジ2020」¹³⁾が策定され、具体的に推進されている。

ちなみに、長崎県の中核市にあたる長崎市では「長崎市第四次総合計画」（計画期間：2011年度～2020年度）¹⁴⁾が策定され、その基本構想において「個性輝く世界都市」「希望あふれる人間都市」を将来の都市像として掲げ、その実現に向けたまちづくりの基本姿勢を「つながりと創造で新しい長崎へ」としている。

また、県のもう一つの中核市である佐世保市では、2008年度から「第6次佐世保市総合計画」²⁾がスタートし、「ひと（市民）が中心のまちづくり」を基本にまちづくりの各分野ごとに政策目標を設定し、市民と行政などが協働してまちづくりを進める内容となっており、「ひと・まち育む元気プラン」を計画の愛称としている。すでに、佐世保市では前期基本計画（2008年度～2012年度）の計画期間が終了し、2013年度から後期基本計画（2019年度まで延長更新）が推進されている¹⁵⁾。

さて、平戸市では、2005年10月に新しい平戸市が誕生してから、2つの総合計画が策定されている。「第一次総合計画」は2008年度～2017年度までの10年間のまち

づくりの指針となるもので、「ひと（HITO）響きあう 宝島 平戸」を市の将来像として掲げ、「ともに支えあっていく協働の精神による市民と行政が一体となったまちづくり」を基本理念として、市民と行政の協働による平戸市の発展と飛躍を目指した計画となっている。また、2014年度に「平戸市ずっと住みたいまち創出条例」を制定するとともに、2015年度には、「平戸市人口ビジョン」および「平戸市総合戦略」を策定し、人口減少や少子高齢化に対する取り組みを進めている。

そして、今回、策定した「第二次総合計画」は2018年度～2027年度までの10年間のまちづくりの指針となるもので、計画の名称を「平戸市未来創造羅針盤」と名づけ、市が描く未来像を「夢あふれる 未来のまち 平戸」とした。

第二次となる総合計画の策定にあたっては、市民や有識者ら21人の委員からなる「平戸市総合計画審議会」（会長：筆者）に対して、2016年9月に市長が諮問を行い、約1年半にわたって基本構想や基本計画の内容などに関して幾度かの協議・審議を重ねた。また、基本構想の策定にあたっては、素案を作成するため、審議会委員のうち6人で構成する「基本構想起草委員会」を編成して、平戸市を取り巻く現状や課題などについて、1人ひとりの市民を主役として、市民と行政が協働でまちづくりに取り組む必要性を主眼に置きながら、集中的に協議を行っている。

その間、市民アンケート、市内7地区でのワールドカフェ（ワークショップ）および総合計画に対するパブリックコメント（意見募集）を実施するとともに、市政懇談会や地域協議会・地域審議会などでの説明や協議を行うなど、可能なかぎり、平戸市民の要望や意見が十分に総合計画全体に反映できる仕組みを構築し、さまざまな形での意見交換などを行っている。

第Ⅲ-2-1図は、平戸市未来創造羅針盤の構成を図案化したものである。

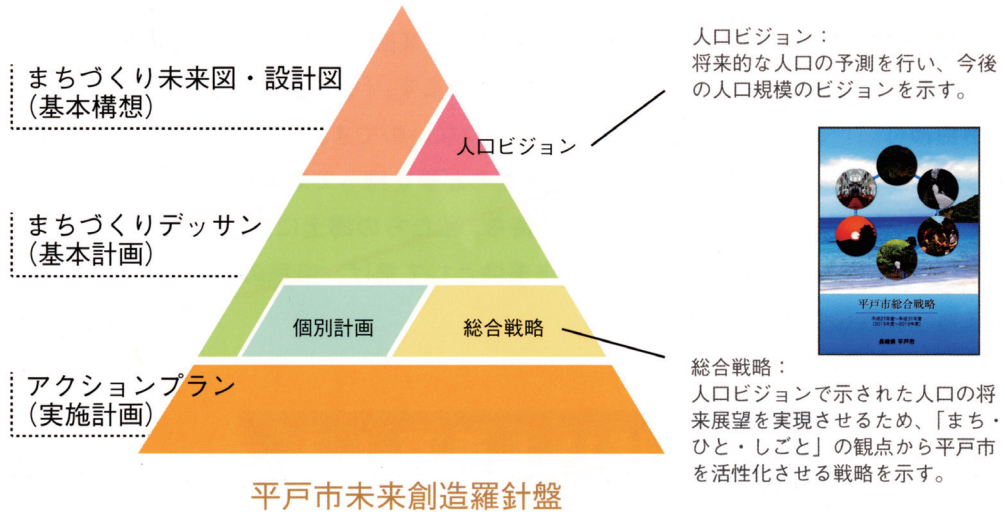
この平戸市未来創造羅針盤は、平戸市のまちづくり全般にわたる内容となっており、中長期的な展望に立ち、計画的・効率的な行政運営を行うための指針を示し、また、行政運営のみならず、市民と行政が目標を共有しともにまちづくりをすすめるための考え方や方針を示したものである。

図案化した上部には、基本的な指針として、まちづくりを展開していくための基本理念や目標を示した「まちづくり未来図・設計図」（基本構想）がある。このまちづくり未来図・設計図の期間は、2018年～2027年までの10年間である（総合計画全体の期間については、第Ⅲ-2-2図を参照）。次に、まちづくり未来図・設計図を実現するための基本的施策の方向性を体系的に明示したものが「まちづくりデッサン」（基本計画）である。このまちづくりデッサン（前期）の期間は、2018年～2022年までの5年間となっている。そして、最後に、まちづくりデッサンに示

した基本的な施策を具体的に実施するための財政計画と連動した実施計画を「アクションプラン」として示している。このアクションプランの期間は、3年間とし毎年見直すものとなっている。

なお、「まちづくり未来図・設計図」および「まちづくりデッサン」については、

第Ⅲ-2-1図 平戸市未来創造羅針盤の構成



(出所) 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』(第2次平戸市総合計画 2018-2027)、2018年より。

第Ⅲ-2-2図 総合計画の期間

H30年度 (2018年)	H31年度 (2019年)	H32年度 (2020年)	H33年度 (2021年)	H34年度 (2022年)	H35年度 (2023年)	H36年度 (2024年)	H37年度 (2025年)	H38年度 (2026年)	H39年度 (2027年)
まちづくり未来図・設計図 (平成30(2018)~平成39(2027)年度)									
まちづくりデッサン (前期) (平成30(2018)~平成34(2022)年度)					まちづくりデッサン (後期) (平成35(2023)~平成39(2027)年度)				
アクションプラン			アクションプラン		アクションプラン				
					毎年度見直し				

(出所) 第Ⅲ-2-1図に同じ。

定期的な事業成果・効果の点検結果をふまえた上で、その後の計画推進に問題が生じた場合や市に大きな社会情勢の変化などが起きた場合は、計画期間内にあっても、必要に応じて見直すこととなっている。

2-2. 平戸市の未来像実現に向けての方向性と主要課題

今回の平戸市未来創造羅針盤が描く平戸市が描く未来像は、「夢あふれる 未来のまち 平戸」である。

「夢あふれる」という言葉には、平戸市が有する“歴史”、“恵み” および “祈り” をさらに輝かせることを通して「シビックプライド」（＝誇りや愛着）を高め、市民すべてのさまざまな思いを実現可能とする「夢のようなまち」とする願いが込められている。また、「未来のまち」という言葉には、他のどの地域にはない“平戸らしさ”を磨きあげ、市民すべてが明るく元気に活躍する未来を描くことができるという願いが込められている。

さて、この平戸市が描く未来像の実現に向けて、平戸市未来創造羅針盤では、以下の3つの方向性と今後取り組むべき5つの主要課題を提示している¹⁶⁾。

まず、具体的なまちづくりを目指す3つの方向性として掲げているのは、「みんなで手を取り合うまち」、「にぎわいをつくりだすまち」および「誇りをもてるまち」である。

一般的に、日本の地方都市は、少子高齢化をはじめ、市民の価値観や生活スタイルの多様化、核家族化、地方圏から大都市圏への人口移動などによる地域の過疎化などで、従来みられた地域コミュニティの機能が弱体化し、市民相互の連帯感が希薄化するといった問題が続いており、この点においては平戸市とて例外ではない。そこで、具体的なまちづくりにおいては、「みんなで手を取り合うまち」づくりを目指すことは是非とも求められる事柄である。

また、平戸市は日本で最初となる海外との交流を行い、古くから海外貿易が盛んに行われ、国際都市「西の都」として日本の近世、近代を切り開く礎となったまちだけに、華やかでにぎわいのあるまちであったと想像できるが、時代の変遷・変化とともに、従来の平戸市の輝きとにぎわいが失われつつある状況にあるといえる。そこで、市民が一体となって平戸市の新たな輝きとにぎわいを創造する、すなわち、「にぎわいをつくりだすまち」づくりを目指す必要がある。

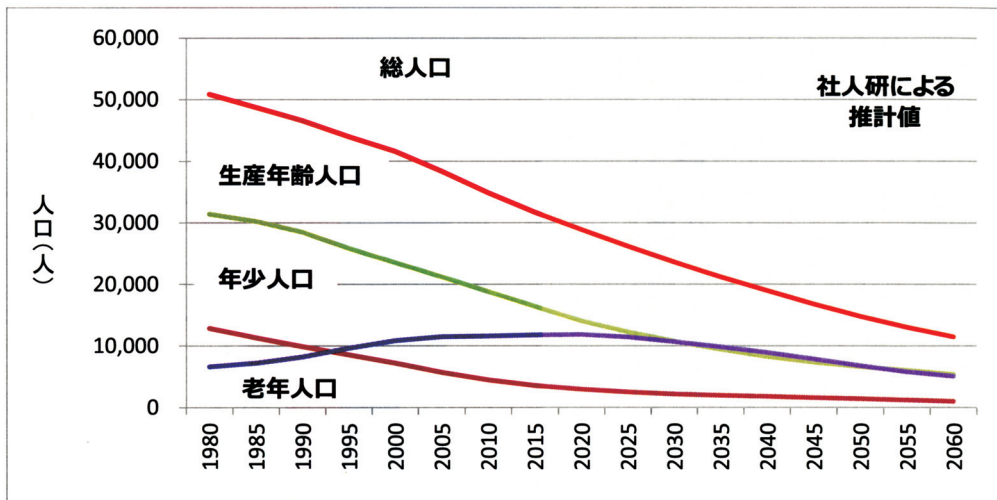
そしてさらには、まちの主役はあくまでも市民一人ひとりである。したがって、まちづくりを目指すうえで、市民みずからが、いつまでも「ここに住み続けたい」、たとえいったん地元を離れても「また帰ってきたい」と思えるような、自分のまち

に対する“愛着”や“誇り”、すなわち、“シビック・プライド”をはぐくむことが重要である。市民みずからも、誇りを持ってもまちに生まれ住むことは幸せである。このことから、「誇りをもてるまち」づくりが必要であり重要であるといえよう。

つぎに、今後取り組むべき5つの主要課題としては、「未来の羅針盤となる人をつくる」、「まちの灯台を灯す絆を紡ぐ」、「魅力を描いた帆をあげる」、「強く漕ぎだす産業をつくる」および「自ら経営の舵を切る」を挙げている。

“まち”は、人がいてこそそのまちである。どんなに、モノ、金および情報が存在

第Ⅲ-2-3図 平戸市の人口の推移と将来推計



年齢3区分人口の推移	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
総人口(人)	50,849	48,719	46,572	43,966	41,586	38,389	34,905
年少人口(人)	12,849	11,315	9,872	8,520	7,195	5,709	4,477
生産年齢人口(人)	31,407	30,222	28,482	25,827	23,534	21,225	18,848
老年人口(人)	6,593	7,182	8,218	9,619	10,857	11,455	11,580

年齢3区分人口の予測	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
総人口(人)	31,724	28,915	26,192	23,611	21,210	18,959	16,791	14,794	13,016	11,457
年少人口(人)	3,562	2,987	2,508	2,160	1,944	1,777	1,601	1,403	1,197	1,019
生産年齢人口(人)	16,395	14,085	12,262	10,754	9,423	8,255	7,331	6,594	6,035	5,358
老年人口(人)	11,766	11,843	11,421	10,697	9,844	8,927	7,858	6,798	5,783	5,080

※「国勢調査」「将来推計用ワークシート」より作成

(出所)長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市総合戦略』(2015年度～2019年度)、2016年より。

していても、まちの主役である人が存在していなければ、まちは消滅してしまう。平戸市の総人口は、2010年に34,905人であった。しかし、国立社会保障・人口問題研究所の人口推計方法を用いた推計によると、平戸市の総人口は2040年には20,000人を割り込み、2060年には11,457人まで減少すると予測されている（第Ⅲ-2-3図参照）¹⁷⁾。かくして、市民こそが平戸の「宝」であるとする以上は、平戸市に生きてまちを築いていく人の育成を進めていく必要があり、主要課題の第一としての「未来の羅針盤となる人をつくる」という点は重要である。

第二に「まちの灯台を灯す絆を紡ぐ」ということであるが、平戸市の地域コミュニティは、子どもや高齢者などの見守り、助け合いなどの相互扶助、伝統文化の維持などさまざまな機能を担ってきたが、既述したように、平戸市もまた少子高齢化や人口減少、あるいはまた価値観や生活スタイルの多様化などにより、従来の地域コミュニティのあり方が変化しつつある。したがって、市民が相互の絆を深め、人口流出の抑制、子育て支援、産業の振興などの重要な役割を担っている地域コミュニティに関心をもち、市民がその絆を大切にされた地域の活性化につなげることが必要である。

第三に、平戸市は美しく豊かな自然に囲まれ、また海外交流などを示す数々の歴史的遺跡をはじめ、他の地域にはない多くの文化的遺産がある。まさしく、魅力あふれるまちであることから、豊かな自然環境を保全しながら¹⁸⁾、今後は平戸市が持つ自然や文化財などの地域資源を最大限に活用し、魅力と価値を高め、情報発信するとともに、観光を強い産業に育成し多くの観光客が集う交流とにぎわいの拠点づくりに取り組むという意味で、「魅力を描いた帆をあげる」という取り組みが必要である。

第四に「強く漕ぎだす産業をつくる」という取り組みであるが、今後とも、継続して平戸市内において新たな仕事を生み出すための企業誘致、創業支援および市内企業などの振興に取り組み、雇用創出につなげる必要がある。

そして第五に、日本では地方分権が加速し、地域の独自性と個性が際立つ時代にあって、平戸市も限られた財源と人材を有効に活用しながら、市民の自主性を活かすとともに、市民と行政の協働と創意工夫による特色をもった地域経営を進めていく必要がある。その意味でも、「自ら経営の舵を切る」という取り組みが求められるのである。

2-3. まちづくりの未来像実現に向けたプロジェクト

平戸市未来創造羅針盤では、未来像の実現に向け、重点プロジェクトとして「シ

ン・平戸創生プロジェクト」を設定するとともに、今後、平戸市の市民と行政が一体となり強い覚悟で取り組むべき共通プロジェクトと6つの基本プロジェクトを中心にした「まちづくりプロジェクト」が示されている。そして、もう一つの大きなプロジェクトとして「地域プロジェクト」がある。平戸市内には、それぞれの特色をもつ「平戸北部地区」、「平戸中部地区」、「平戸南部地区」、「生月地区」、「田平地区」、「大島地区」および「度島（たくしま）地区」に区分できる地域があり、各地域の独自性や優位性を活かしつつ10年後も生き生きとした地域であるための取り組みが掲げられている。

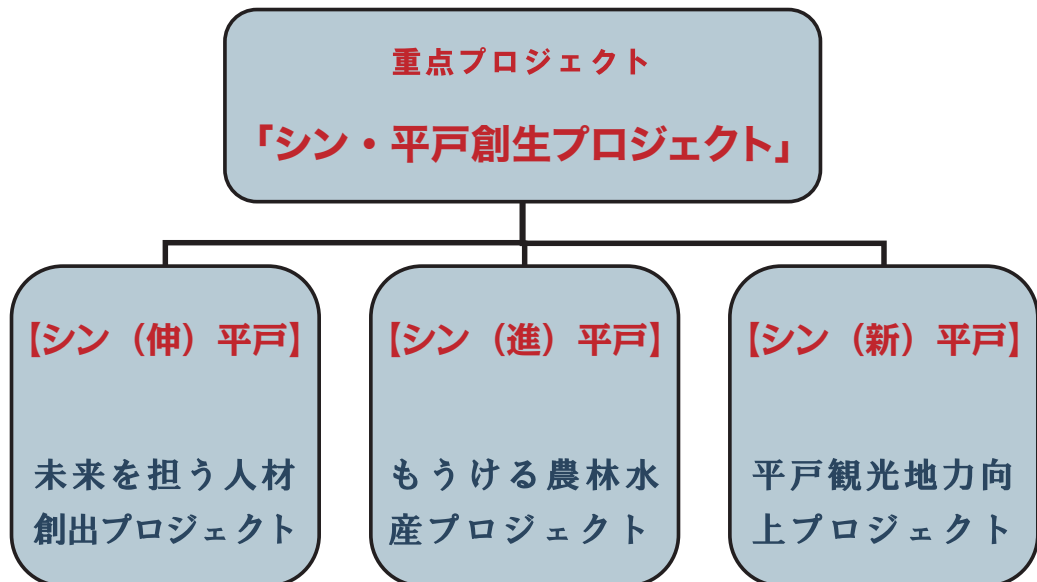
ただし、ここでは、紙幅の関係から、重点プロジェクトである「シン・平戸創生プロジェクト」と「まちづくりプロジェクト」とについて簡潔に紹介してみたい¹⁹⁾。

まず、重点プロジェクト「シン・平戸創生プロジェクト」については、以下のとおりの内容となっている（第Ⅲ-2-4図参照）。

(1) 未来を担う人材創出プロジェクト〔シン（伸）平戸〕

人口減少が進む中における産業人材確保のため、大学や専門学校などの高等教育機関の誘致とともに、未来の平戸市を担う産業人材の育成を強化し、地域産業が活気にあふれ持続的に発展していくための取り組みを進める。

第Ⅲ-2-4図 重点プロジェクト「シン・平戸創生プロジェクト」



（出所）長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）、2018年を基に筆者が作図したもの。

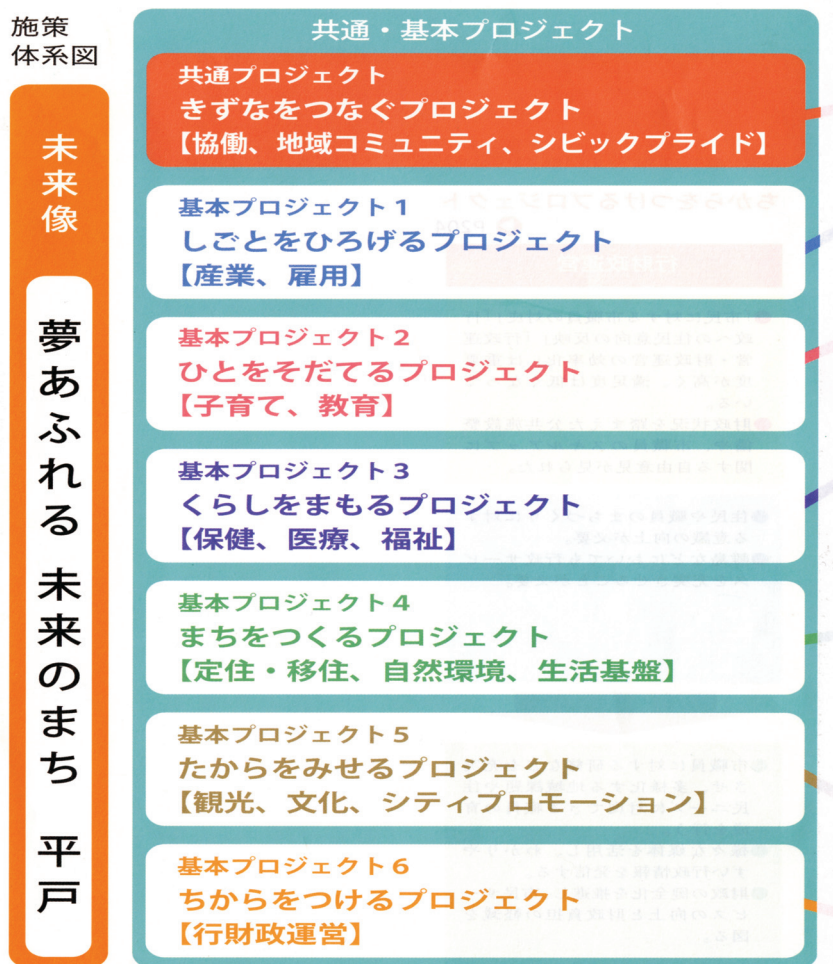
(2) もうける農林水産プロジェクト〔シン（進）平戸〕

農林業において、農業の法人化や協業化の推進とともに、ICTなどの情報通信技術を活用した省力化を推進する。また、水産業においても、資源管理型漁業の推進や戦略的流通販売体制の構築に取り組む。

(3) 平戸観光地力向上プロジェクト〔シン（新）平戸〕

これまで国内外からの観光客を迎えてきた平戸市において、観光業は重要な基幹産業のひとつであり、観光業の浮揚は今後の平戸市の発展に欠かせないことか

第Ⅲ－２－５図 まちづくりプロジェクト
―共通プロジェクト・6つの基本プロジェクト―



(出所) 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画2018-2027）、2018年より。

ら、多くの観光客でにぎわうまちを目指した取り組みを行う。

つぎに、第Ⅲ-2-5図は、「まちづくりプロジェクト」を体系化した図である。

まず、共通プロジェクトを「きずなをつなぐプロジェクト」とし、市民と行政の協働によるまちづくりとずっと住み続けたい平戸市の創出への重点的な取り組みの内容として、①市民と地域、行政の連携による持続可能な集落形成の推進、②地域活動の担い手づくりや場づくりの推進、および、③地域づくりを担うコミュニティ活動への支援を挙げている。

基本プロジェクトとしては、6つのプロジェクトが考えられており、それぞれ、以下の通りとなっている。

(1) 基本プロジェクト1——「しごとをひろげるプロジェクト」

地域の特色を活かした産業振興による経済の活性化を目指して、大きく、①たくましく元気な産業の振興、②魅力ある仕事の創造、を基本方向としている。

(2) 基本プロジェクト2——「ひとをそだてるプロジェクト」

こどもを安心して産み育て生涯を通して学べる環境の充実を目指して、大きく、①健やかに成長する子育て環境の整備、②生涯にわたる学習による人づくり、を基本方向としている。

(3) 基本プロジェクト3——「くらしをまもるプロジェクト」

生きがいを感じ安心していきいきと暮らせる地域の形成を目指して、大きく、①笑顔輝く健康生活の実現、②安心安全な医療体制の充実、③みんなが活躍できる福祉の充実、を基本方向としている。

(4) 基本プロジェクト4——「まちをつくるプロジェクト」

まちの活気をつくる定住・移住の促進と安心できる生活空間の確保を目指して、大きく、①住みたい住み続けたいまちづくり、②未来へつなぐ自然環境、を基本方向としている。

(5) 基本プロジェクト5——「宝を見せるプロジェクト」

観光平戸の再生とシティプロモーションによる交流人口の拡大を目指して、大きく、①キラリ輝く観光地平戸、②後世に伝える平戸の宝、③シティプロモーション戦略の推進、を基本方向としている。

(6) 基本プロジェクト6——「ちからをつけるプロジェクト」

効果的・戦略的な行政経営の推進を目指して、大きく、将来を見据えた行財政運営を基本方向とし、①持続可能な自治体を経営する、②安定した健全財政を推進する、を基本施策としている。

以上に挙げた重点プロジェクト「シン・平戸創生プロジェクト」や「まちづくりプロジェクト」、そしてここでは紹介できなかった「地域プロジェクト」は、平戸市の未来像を実現するために、強い覚悟のもと、市民と行政が一体となって取り組む重要なプロジェクトであり、平戸市の未来を創造する具体的な取り組みであることから、これからの展開が注視される場所である。

IV. 結びに代えて—いまを〈生きる〉ということ—

小稿では、長崎県の地方都市のひとつであり、長崎県内の有名な観光地としても知られる平戸市の「平戸市未来創造羅針盤」（第2次平戸市総合計画）を中心に提起し、平戸市がどのようなまちづくりを計画し展開しようとしているのか、その主要な内容について簡潔に整理してみた。

「序言」でも述べた通り、今回、筆者が「平戸市総合計画審議会」の会長として総合計画の策定にたずさわったが、その間、実際に幾度か市のほうに出向き、平戸市における市民の地域生活の実情、また市民のまちの将来への気持ちや考えなどをリサーチでき、さらに、まちづくりへの強い思いに触れることができた。

既述したように、今回の平戸市未来創造羅針盤が描く未来像は、「夢あふれる 未来のまち 平戸」であるが、すでに総合計画の完成とともに審議会は解消しているものの、筆者としては、未来像として掲げた「夢あふれる」「未来のまち」を目指す平戸市のまちづくりに注目していきたいと考えている。

最後に、現代の〈いま〉を生きている筆者が、常日頃心に描いていることについて記し、小稿の結びに代えることとしたい。

既述のように、現代の日本人の平均寿命は世界トップレベルにあり、今後の生活環境の改善や医療・看護技術の一層の進歩によって、いま以上に平均寿命が延びて、多くの人間が100歳を迎える時代が実現する可能性も否定できない¹⁾。

近年、よく耳にする言葉として、「人は、まわりが笑うなかで泣きながら生まれる。人生の終わりには、まわりが泣くなかで笑いながら死ぬるように生きていくことが大切」、あるいはまた、「生まれる時は、自分では何もできずに人の手を借りるばかりだが、死ぬ時はみずから死に方を選ぶことができる」という、いわゆる“名言”があるが、そうであるなら、なおさら、人間はどう生きるべきか、どのように死ぬべきかということに、真剣に向き合う必要がある。

スイスの精神科医であったポール・トゥルニエ（Tournier,P.）氏は、その著書『人生の四季』の中で、「人間の生涯は絶え間ない発展の途上にあること、そして人生

には誰もがかならず経なければならぬさまざまな時期²⁰⁾があると記しているが、それぞれの人生の過ごし方は違っているととしても、一人ひとりの人間の一生には、その当事者にしかわからない、いくつもの変化があり、立ち止まりや成長・発展がこの地上を終える瞬間まで続くものかもしれない。そして、人間としての大きな魅力は、その時々いろいろな課題や問題などとしっかり向き合うことによって豊かに醸し出されるのかもしれないのである。

筆者は、私たち一人ひとり、この世での〈いのち〉の時間は異なるとはいえ、誰もが生きている、生かされている大切な意味や意義があり、その個人にだけ与えられた特別な役割や使命があると考えている。

このような考えに立てば、実際的に日常生活を過ごしている地域社会は異なるとしても、高価で、何ものにも代えがたい一人ひとりの人間が、置かれた場において誠実にその役割や使命を果たすまでは、さまざまな苦難や困難があったとしても生き続け、年齢を重ねるごとに、その時その時の自分を引き受けて、人生を積極的で、前向きに、そして毎日を丁寧に、大事にしがら歩む、ということがとても大切ではないだろうか、と考えるのである。

〔注〕

- 1) 村上則夫「地域社会の再創造のあり方に関する一考察—まちづくりへの取り組みとその方向性を巡る思索—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第50巻第4号、長崎県立大学佐世保校学術研究会、平成29年、120頁および122頁。
- 2) 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）、2018年。なお、小稿の執筆にあたっては、必要に応じて、『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）の概要版、あるいはまた、平戸市のホームページ(<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/>)を参照している。
- 3) 厚生労働省「平成29年簡易生命表の概況」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html> より。
- 4) 公益財団法人長寿科学振興財団「健康長寿ネット」
<http://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyojyu-tyojyu-shakai/nagaiki.html> より。
- 5) メットライフ生命保険株式会社の調査（調査は、全国の20歳～79歳の男女14,100人を対象に、2018年6月に実施）によれば、長生き志向について、「あまりしたくない」（28.9%）を含め、「長生きしたくない」と答えた割合は全体の41.2%で、世代別では60歳～70歳代（38.0%）が最も少なく、50歳代が47.7%で最多の割合となっている。また、「何歳まで生きたいか」との問いに対しては、20歳代の男性は78.1歳で、女性の方は76.9歳と回答しており、世代別でも20歳代の男女が最も低く、いわゆる「希望寿命」が男女ともに2017年の実際の平均寿命を下回る回答となっている。さらに、「老後に不安を感じる」人の割合は、81.1%で、世代別で

は40歳代の87.6%が最も高く、60歳～70歳代の73.6%が最低だとする結果が出ている。むしろ、この大手生保の調査結果から、すべてを推し量ることは無謀であるが、日本人にとって、必ずしも、「長寿」＝「幸福」という図式が単純に成り立つとは言い難いのが現状であるといえる。

- 6) 内閣府「国民生活に関する世論調査（2018年度）」
<http://www.survey.gov-online.go.jp/index-ko.html> より。
- 7) 筆者の著作の中に、地域社会の発展については、人間の幸福や人間の尊厳といった視点も含めながら進めるべきことを説いたものがある。たとえば、村上則夫『地域社会システムと情報メディア〔三訂版〕』、税務経理協会、2005年、および、村上則夫『社会情報入門―生きる力としての情報を考える―』、税務経理協会、2009年など。
- 8) 最近、筆者の著した小稿のなかに、人間の〈誕生〉から〈死〉までの一生を自然界の「四季」(four seasons)にたとえて、人生の四季折々の意味、そして折々の季節において直面する課題や大切にすべき事柄などについて散策をするかのごとく思索しているものがある。興味のある方は次を参照されたい。村上則夫「人生の四季に関する散策的思考―人生の春夏秋冬を生きる―」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、2018年、33-44頁。
- 9) このような地域課題については、著者の著した次の小稿で取り扱っているのを参照されたい。村上則夫「地域社会の再創造のあり方をめぐる思索―心豊かなまちづくりの考え方とその方向性―」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第51号、実践経営学会関西支部会、2016年、23-34頁、および、村上則夫「地域社会の再創造のあり方に関する一考察―まちづくりへの取り組みとその方向性を巡る思索―」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第50巻第4号、長崎県立大学佐世保校学術研究会、2017年、119-141頁。
- 10) 長崎県平戸市「行政統計」の統計データ
<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/kurashi/gyosei/toukei/koku01.html> より。
- 11) 長崎県平戸市企画課『平戸市総合計画』（2008年度～2017年度）、2008年より。
- 12) 長崎県平戸市「観光統計」（2017年）
<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/kurashi/gyosei/toukei/kanko/index.html> より。
なお、2018年に長崎県と熊本県に点在する12の資産をまとめた「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がユネスコの世界文化遺産に登録されている。この「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」構成資産のなかに、平戸市の「平戸の聖地と集落〔春日集落と安満岳〕」および「平戸の聖地と集落〔中江ノ島〕」がある。『日本経済新聞』（2018年9月8日付、朝刊）によると、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が登録されてから、長崎県と熊本県の各構成資産がある地域への2018年7～8月の来場者は前年同期比1.5倍に増えるなど着実に登録効果があらわれているという。そのなかで、最も伸び率が大きかったのは平戸市の「平戸の聖地と集落」で、前年の観光客は306人だったのに対して、登録決定後は3,330人と訪問客は10倍以上に急増しているという。
- 13) 長崎県の『長崎県総合計画 チャレンジ2020』に関しては下記のWebサイトを参照されたい。
https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/kennokeikaku-project/sougou_plan_challenge2020/
- 14) 長崎県長崎市の『長崎市第四次総合計画』に関しては下記のWebサイトを参照されたい。

<http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/730000/731000/p000297.html>

- 15) 長崎県佐世保市の『第6次佐世保市総合計画』に関する情報については下記のWebサイトを参照されたい。
<http://www.city.sasebo.lg.jp/kikaku/zenki-suishin.html>
- 16) 具体的なまちづくりを目指す3つの方向性と今後取り組むべき5つの主要課題については、長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）、2018年の第1編第1部第2章および第1部第4章を参照されたい。
- 17) 詳細については、長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市総合戦略』（2015年度～2019年度）、2016年を参照されたい。なお、第Ⅲ-2-3図内の年少人口は15歳未満人口のこと、生産年齢人口は15歳以上65歳未満人口のこと、そして老年人口は65歳以上人口のことである。
- 18) 平戸市は、2014年9月に全国初の「CO₂排出ゼロ都市宣言」を行っている。
- 19) 「シン・平戸創生プロジェクト」については長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）の66-71頁、また、「まちづくりプロジェクト」については、同『羅針盤』の第2編を参照されたい。
- 20) Tournier,P.,*Die Jahreszeiten unsres Lebens:Entfaltung und Erfullung* : Furche-Verlag Hamburg, 1967(三浦安子訳『人生の四季—発展と成熟—』、日本キリスト教団出版局、2007年、33頁)。

【主要参考文献】

- 長崎県平戸市企画課『平戸市総合計画』（2008年度～2017年度）、2008年。
- 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市総合戦略』（2015年度～2019年度）、2016年。
- 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）、2018年。
- 長崎県平戸市財務部企画財政課『平戸市未来創造羅針盤』（第2次平戸市総合計画 2018-2027）、概要版、2018年。
- 西日本新聞社編『西日本新聞』、2018年9月17日付、朝刊。
- 日本経済新聞編『日本経済新聞』、2018年9月8日付、朝刊。
- 村上則夫『地域社会システムと情報メディア〔三訂版〕』、税務経理協会、2005年。
- 村上則夫『社会情報入門—生きる力としての情報を考える—』、税務経理協会、2009年。
- 村上則夫「地域社会の再創造のあり方をめぐる思索—心豊かなまちづくりの考え方とその方向性—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第51号、実践経営学会関西支部会、2016年、23-34頁。
- 村上則夫「地域社会の再創造のあり方に関する一考察—まちづくりへの取り組みとその方向性を巡る思索—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第50巻第4号、長崎県立大学佐世保校学術研究会、2017年、119-141頁。
- 村上則夫「人生の四季に関する散策的思考—人生の春夏秋冬を生きる—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、2018年、33-44頁。
- Tournier,P., *Die Jahreszeiten unsres Lebens:Entfaltung und Erfullung* : Furche-Verlag Hamburg,1967
(三浦安子訳『人生の四季—発展と成熟—』、日本キリスト教団出版局、2007年)。

〈参考サイト〉

公益財団法人長寿科学振興財団「健康長寿ネット」

<http://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/tyojyu-shakai/nagaiki.html>

厚生労働省「平成29年簡易生命表の概況」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html>

長崎県『長崎県総合計画 チャレンジ2020』

https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/kennokeikaku-project/sougou_plan_challenge2020/

長崎県佐世保市『第6佐世保市総合計画』関係情報

<http://www.city.sasebo.lg.jp/kikaku/zenki-suishin.html>

長崎県長崎市『長崎市第四次総合計画』

<http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/730000/731000/p000297.html>

長崎県平戸市「観光統計」（2017年）

<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/kurashi/gyosei/toukei/kanko/index.html>

長崎県平戸市「行政統計」の統計データ

<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/kurashi/gyosei/toukei/koku01.html>

内閣府「国民生活に関する世論調査（2018年度）」

<http://www.survey.gov-online.go.jp/index-ko.html>

平戸市ホームページ

<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/>